

# ポーランド映画祭2012

フランスのヌーヴェル・ヴァーグやイタリアのネオ・レアリズモなど戦後のヨーロッパでは新しい映画芸術を模索する動きが活発でした。

しかしながらこの時期、ささまじい勢いでヨーロッパの映画界を席卷していたポーランドを忘れてはいけません。

アンジェイ・ワイダ、アンジェイ・ムンク、イエジー・カヴァレロヴィッチといった監督たちが国際映画祭で数々の賞を獲り、“鉄のカーテン”の向こう側にも素晴らしい映画を作る作家がいる事に西側のメディアは驚き、その結果〈ポーランド派〉という名称も生まれました。

本映画祭は1950年代半ばから1960年代初頭にかけて発表された〈ポーランド派〉の作品群や劇場未公開の“知られざる傑作”、今なお映画の最前線を疾走する三大巨匠スコリモフスキ、ポランスキー、ワイダの若き日の作品をお届けするものです。

日本を「第二の故郷」と断言し、大の親日家でもあるイエジー・スコリモフスキ監督（『アンナと過ごした4日間』、『エッセンシャル・キリング』）による監修のもと、ポーランド広報文化センターの全面協力で開催されるこの企画は映画ファンの皆さまにとってもなく贅沢な時間を与えてくれるでしょう。

ぜひ、御来場下さい。



### 影

監督：イエジー・カヴァレロヴィッチ
1956年／98分／35mm
■ アンジェイ・ワイダ、アンジェイ・ムンク監督と共に、1950年代後半のポーランド映画界に登場した新潮流〈ポーランド派〉を代表する作家の一人、カヴァレロヴィッチによる社会派ミステリー。列車から転落死したスパイの男をめぐる謎解きの物語が斬新な編集で描かれた本作は、戦争中から戦後にかけてのポーランドの闇を鮮やかに照射した傑作サスペンスである。

11/26日11:00 ・ 12/5金11:00



### 地下水道

監督：アンジェイ・ワイダ
1957年／96分／デジタル
■ 「灰とダイヤモンド」と並び〈ポーランド派〉の傑作と絶賛されたワイダの代表作。ワルシャワの対独レジスタンスが迷路のような地下の下水道で繰り広げる壮絶な戦いを非情なドキュメンタリー・タッチで描いた本作は、光と影を巧みに使った斬新な演出で後年ホラー、サスペンスジャンルの映画に多大な影響を与えている。カンヌ映画祭審査員特別賞。
12/5金18:30 ・ 12/6金16:00

### エロイカ

監督：アンジェイ・ムンク
1957年／87分／デジタル
■ わずか5本の長編作品を残し40歳の若さで事故死したアンジェイ・ムンクは硬質で無垢な芸術表現、残酷なまでの知的リアリズム、人間に対する深い洞察をもつ作風で、現在もお色あせることなく多くの作家に影響を与えている。ワルシャワ蜂起の内実と平和な収容所でおこる悲劇を2部構成で描いた本作。“戦争”を主題に扱うことの多い〈ポーランド派〉の代表的な1本である。

11/24日13:30 ・ 12/1日15:30 ・ 12/3月11:00



### 鉄路の男

監督：アンジェイ・ムンク
1957年／89分／デジタル
■ 列車事故を防ごうとして命を落とした退職鉄道技師の物語をリアリズム・タッチで描いたムンクの意欲作。社会主義政権の自由化進展をうながした1956年の政変（十月の春）をとりあげた最初の映画と言われている。当時の若手映画人が崇拜していた「羅生門」や「市民ケーン」にならない複雑な物語構成、パン・フォーカスによる映像等、監督の作家的成熟がかいまみられる一編。
11/25日16:00 ・ 12/1日13:30 ・ 12/7金18:30



### 灰とダイヤモンド

監督：アンジェイ・ワイダ
1958年／102分／デジタル
■ ヴェネチア映画祭で国際批評家連盟賞を受賞しポーランド映画の存在を一躍世界に知らしめた歴史的な作品。戦後のポーランド映画界を牽引した巨匠ワイダの名は本作によって映画ファンにあまねく知られる事となった。戦争中レジスタンスとして活動し戦後はテロリストとなり悲惨な最後を遂げた青年の姿をシャープなモノクロ映像で描いた傑作!
11/27日18:30 ・ 12/1日11:00 ・ 12/5金13:30



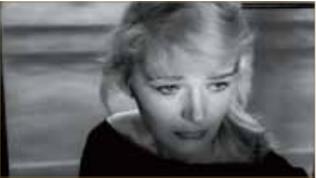
### 夜の終りに

監督：アンジェイ・ワイダ
1961年／87分／デジタル
■ 戦後のポーランドで空虚な日々を過ごす若者の青春群像にスポットを当てた巨匠ワイダの異色作。ウッチ映画大学に在学中のイエジー・スコリモフスキが脚本を書き、ポーランド・ジャズ界の才人クシシュトフ・コメダが音楽を担当した本作は、主題を前面に押し出すワイダのスタイルが影をひそめ男女の心の触れ合いとすれ違いを繊細なタッチで描いた名作。
11/26日13:30 ・ 12/1日13:30 ・ 12/4日16:00



### 尼僧出アンナ

監督：イエジー・カヴァレロヴィッチ
1961年／108分／デジタル
■ 「夏の終わりの日」で監督デビューしたコンヴィツキが共同脚本に参加した本作はカンヌ映画祭で審査員特別賞を受賞したカヴァレロヴィッチの代表作。17世紀の尼僧院を舞台に悪魔にとり憑かれた女院長と悪魔払いとして派遣された若い神父との異様な愛をととして、人間の抑圧と自由という普遍的な主題を描いた傑作。撮影と美術の超現実的な美しさに耽溺する一本。
11/24日11:00 ・ 12/6金13:30



### 夜行列車

監督：イエジー・カヴァレロヴィッチ
1959年／100分／デジタル
■ 恋人との別れを決意して旅に出た傷心の女と逃亡中の殺人犯…。その列車にはさまざまな想いを背負った人々が乗り合わせていた。ワルシャワからバルチック海へと疾走する列車の中で人それぞれの人生模様を描かれる本作は、メロドラマ仕立てでありながら大胆なカメラワークでクールな叙情性を醸し出したカヴァレロヴィッチの才気が光る秀作。
11/24日18:30 ・ 11/26日16:00 ・ 12/6金11:00



### 沈黙の声

監督：カジミェシュ・クツツ
1960年／98分／デジタル
■ 〈ポーランド派〉の活躍した時期に作られた作品ながら長い間論じられることのなかった幻の傑作。後のヌーヴェル・ヴァーグやアントニオニーの作品群を見した映画である。逃亡兵と若い女の恋物語がわずかな台詞、ヴォイチェフ・キラルの音楽、大胆な画面構成で描かれ、製作当初当局からすぐに上映許可が下りなかった衝撃の1本。
11/27日11:00 ・ 11/29日16:00 ・ 12/2日13:00



### 列車の中の人々

監督：カジミェシュ・クツツ
1961年／98分／デジタル
■ 「訪問者なし」で先鋭的な映画表現を試みたクツツだが本作では細かい観察に基づいたリアリズム描写に挑戦している。第二次大戦中の地方駅を舞台に“ありふれた1日”の出来事を寄せ集めに構成し、当時のポーランド社会を描こうとしたのである。ワイダと異なり主人公を英雄的に扱わない視点にクツツの作家性がよく表われている一作。
11/26日18:30 ・ 12/2日11:00



### 不運

監督：アンジェイ・ムンク
1960年／92分／デジタル
■ 1930年代から1950年代のポーランドを舞台に日和見主義者の青年が語る人生悲話。6回のフラッシュバックにおいて描かれるのは共産主義やファシズム、戦争、抑圧された幼年時代の影響で歴史の犠牲となってしまった悲運な個人の肖像である。ポーランドの作家に時折みられるロマン主義的傾向を辛辣に風刺した一作。
11/29日13:30 ・ 12/2日15:30 ・ 12/7金13:30



### さよなら、また明日

監督：ヤヌシュ・モルゲンシュテルン
1960年／88分／デジタル
■ 「灰とダイヤモンド」で主人公マチェックを鮮烈に演じ東欧のジェームズ・ディーンと呼ばれたズビグニェフ・ツィブルスキが脚本・主演した知られざる傑作。フランス人の若い娘との淡い恋物語がヌーヴェル・ヴァーグ風の軽快なタッチで描かれる。社会主義政権下でありながら西側の文化が徐々に浸透してきた時代の雰囲気表現。ポランスキーのゲスト出演とコメダの音楽も必見・必聴。
11/27日13:00 ・ 11/29金11:00 ・ 12/7金16:00



### 水の中のナイフ

監督：ロマン・ポランスキー
1962年／94分／デジタル
■ 鬼才ポランスキーの名を世界に知らしめた長編処女作。裕福な中年夫婦と貧しい青年が偶然に湖でバカンスを過ごす。主な登場人物3人、全編オールロケで炙りだされる世代間の断絶や階層のギャップ。共同脚本として初めてタッグを組んだイエジー・スコリモフスキの才気とクシシュトフ・コメダのモダン・ジャズがスパークした大傑作。ヴェネチア映画祭批評家連盟賞受賞。
11/25日18:30 ・ 12/4日13:30 ・ 12/6金18:30



### 愛される方法

監督：ヴォイチェフ・イエジー・ハス
1963年／97分／デジタル
■ K・ブランドイスの同名小説に基づき、原作者自身が脚色。人気ラジオ女優がソリヘ向かう機上で、戦時中ナチスに敵対した恋人と、彼を巡って自身が見舞われた悲劇を回想する。ムンクの「パサジェルカ」と同じく、女性の視点を通じて戦争を見つめた作品。英雄的闘争は対象化され、一人の女性が抑圧や不条理を受容しつつ静かに抵抗する姿が描かれる。サンフランシスコ映画祭グランプリ受賞。
11/28日14:30 ・ 11/30金11:00 ・ 12/5金16:00



### バリエラ

監督：イエジー・スコリモフスキ
1966年／81分／デジタル
■ ワイダ、ムンク、カヴァレロヴィッチ等〈ポーランド派〉より一世代下にあたるスコリモフスキは、オーソン・ウェルズ同様、監督・脚本・主演を一人でこなす神童としてポーランド映画界に登場した。世代間の断絶を前衛的な手法で描いた初期の傑作。物語性からの逸脱と研ぎ澄まされた造形美、コメダのサウンド… 21世紀の今観ても全てが斬新で謎めいている!
11/25日11:00 ・ 12/3月19:00 ・ 12/4日11:00



“ポランスキー” 11/30金19:00 ・ 12/2日19:00
“スタレヴィッチ” 12/1日19:00



### パサジェルカ

監督：アンジェイ・ムンク
1963年／61分／35mm
■ アウシュヴィッツ収容所の女看守という特殊な状況下のヒロインを描いたムンクの遺作。作品の大部分を撮り終えた監督が事故死し、残されたフィルムをもとにまとめあげられた。結果、冒頭とエンディングはスチルだけのモンタージュ、収容所の場面はシネマスコープのフィルムという大胆な構成となり緊張感に満ちた映画の効果を生んだ異色の傑作。カンヌ映画祭国際映画批評家連盟賞。
11/27日16:00 ・ 11/30金13:30

戦後ポーランドにおけるアンダーグラウンド・カルチャーの実態を見事に映しだした必見のドキュメンタリー2本!

〈音楽〉



〈ファッション〉



### ビーツ・オブ・フリーダム

監督：ヴォイテク・スウォタ、レシェク・グロインスキ
2011年／61分／デジタル
■ 戦後ポーランドファッションの歴史をモードと政治の関係性から考察したドキュメンタリー。流行を追う人は反体制的として迫害された社会主義国家でデザイナー達はいかに闘ったか? 登場する洋服や数多くのモード写真にみられる驚くべきモダンさにポーランド・サブカルチャーの底力を実感する作品。今も現役のデザイナーや写真家、モデルたちの証言に胸打たれる。
11/28日18:30

11/29金18:30

### ジャパン・プレミア上映!

### スコリモフスキ兄弟最新監督作

監督：ミハウ・スコリモフスキ、ユゼフ・スコリモフスキ
2011年／98分／デジタル
■ 巨匠イエジー・スコリモフスキの息子たちミハウとユゼフ兄弟による最新監督作。デビュー作がベストセラーになった若い人気作家の心理的葛藤を怪奇スリラー風に描いた本作は、主人公の現実と妄想が巧みにミックスされた異色の作品。謎めいた女や奇妙な人物たちの造形に父親譲りの才気が。撮影は近年のスコリモフスキ作品でおなじみのアダム・シコロ。
11/25日13:00